

2017.2.8 00:01

【明美ちゃん基金ミャンマー医療団】「活動を広げてほしい」厳しいミャンマーの地方医療、基金へ期待

「国立ヤンキン子供病院のような病院や医療チームをマンダレーにもつくりたい。人材育成など教育の分野で明美ちゃん基金に協力してもらえたらうれしい」。マンダレー550ベッド子供病院のジン・マー・ティン医師は、国立ヤンキン子供病院で医療団の活動を視察すると、将来への期待を込めてこう話した。

ジン医師によると、マンダレー550ベッド子供病院はマンダレーの病院で最も規模が大きく、ミャンマー北部の各地から心臓病の子供たちが集まってくるという。しかし、同病院には心臓病の手術ができる手術室やカテーテル室がなく、エコー診断ができるのはジン医師のみ。簡単な手術はマンダレー総合病院でワンナ・トゥン医師らが行うが、対応できない子供は600キロ以上離れたヤンゴンのヤンキン子供病院へ転院するか、諦めて死を待つしかない。

「本当はみんなを治したい」とジン医師。ただ、カテーテル室や手術室などの整備には多額の資金が必要で、国が動く必要がある。「まずはエコー診断や手術、カテーテル治療などができる医師を育て、その上で国にカテーテル治療や手術の設備を整えるよう働きかけたい」という。

基金は今後、ジン医師らの希望を運営委員会に伝え、支援のあり方を検討する。医療団の一員で海外での医療支援経験が豊富な昭和大学横浜市北部病院循環器センターの富田英センター長（62）は「基金がマンダレーでも支援することになれば、もちろん協力したい」と意気込む。国立循環器病研究センター臨床工学部の林輝行技士長（51）は「心臓病の子供には多様な症状があり、大人と比べ非常に繊細だ。マンダレーの医師は経験を積み、これから多くの子供たちを救う礎となしてほしい」と期待を込めた。（小林佳恵、小泉一敏）



カテーテル治療を終え、家族と再会するラ・イエイ・メイちゃん＝7日午前、ミャンマー・ヤンゴンの国立ヤンキン子供病院（福島範和撮影）